

ムの時代」、「ITの時代」に足を踏み入れた今日、技術の側からも、このような検討が急がれているのではあるまいか。

(上林 茂暢)

〔農山漁村文化協会、東京都港区赤坂七―六―一、電話〇三―三五八五―一四一、平成十四年三月二十五日、B五判、八〇四頁、本体一―四九二円〕

立川 昭二 著

『生と死の美術館』

本の表紙には、聖母マリアがイエスに乳をふくませているレオナルド・ダ・ヴィンチの、あの「リッタの聖母」が深いのある色調で写し取られている。その美しさと、なんとも言い様のない懐かしさ、それは自分が幼児であったころの思い出であったり、また妻が幼い子を育てていた風景であったりするのだが、そうした感情に押されるようにして本を手に取り、一気に読み終えてしまった。

「あとがき」によれば、本書は医療情報システム企業であるピー・エム・エル社の季刊誌『Vita』に、「美術作品をもとに人間の生死や医療の歩みをたどる内容」で、一九八九年から五〇回にわたって連載されたものがベースになっているという。「美術的遺産を美術史や美術批評とは異なる立場、つまり人間の生き死にの歴史や文化の証しとして考えてみよう」と

する立場」に立って、西洋編二十八、日本編二十六で構成されている。ちなみに前者は「古代ギリシャの奉納板」に始まって「ギリシャの壺絵」「ギリシャの墓碑」「エヒテルナツハ福音聖句集」へと続き、ベン・シャーンの「リルケ」「マルテの手記」より、ジャンセンの「老人と子供」、グランマア・モーゼスの「ドクター」で終わり、後者は興福寺の「阿修羅」に始まって「源氏物語絵巻」「病草紙」「みかえり阿弥陀如来」へと続き、路谷虹児の「胡蝶の夢」、三橋節子の「花折峠」、柄沢齊の「死と変容 旅」で終わっている。全五十四編のほとんどが豪華なカラー版であり、体裁が一編六頁の読み切りとなっているため、たいへん読み易い。

まず第一編のギリシャの神殿医療を表現した出土品では、同一画面に描かれた三人が実は同一人物の経時的な表現であると絵解きしたうえで、医神アスクレピオスへの信仰にもとづく医療の原理、すなわち現代社会から見失われてしまった癒しの文化が解き明かされる。同じギリシャの古代墓碑を扱った第三編では死者と生者とが、また夢と現実とが共在し、両世界間を自由に旅体験できたという当時のコスモロジー、死生観を読み解き、それらを排除してしまった現代の心の貧しさを指摘する。第九編は、ペストがもたらした救いのない恐怖と不安、死を前にした人間の執着と醜態を描いたプリュゲルの「死の勝利」である。これは人の愚かさとはかなさ、その熟視を通して生の充実を説く「メモント・モリ」の主題であったという。

興味深い絵解きはまだまだ続く。その解説には「箴言」にも似た響きがただよい、われわれの心を突き刺し、生き方の軌道修正を迫るものとなっている。一読をお薦めしたい。

(新村 拓)

〔岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五、電話〇三二五二一〇—四〇〇〇、二〇〇三年二月二十七日、四六判、三四八頁、本体三四〇〇円〕

須磨幸蔵、島田宗洋、島田達生 編著

『世界の心臓学を拓いた田原 淳の生涯』

医学を学んだ者は誰でも、心臓の刺激伝導系の存在とこれを発見した田原 淳の名前を知っている。本書は季刊誌「ミクロスコピア」の主筆者である藤田恒夫さん(新潟大学名誉教授)が計画して、心臓とくに刺激伝導系に造詣の深い学者や田原先生とゆかりの深い十九名の方々に執筆を依頼された熱のこもった文章の集大成である。

その題目を列挙してみよう。(一)「刺激伝導系発見への過程」。田原淳博士の足跡をたずねて(島田達生、有田 眞)、刺激伝導系の発見と心臓学の進歩(須磨幸蔵)、田原 淳よりルドヴィヒ・アシヨフへの手紙(島田宗洋)。(二)「田原 淳の追憶」。田原 淳の生家—安岐町(中嶋剛一郎)、田原春塘と田原 淳—中津(川鳶真人)、父の思い出(長岡・田原幸子)、

祖父田原 淳の碑(村山曉)。(三)「田原淳への回帰」。マールブルク大学における日独医学協力について(ホルスト・ケルン)、ルドヴィヒ・アシヨフ—家族の思い出(ユルゲン・アシヨフ)、田原先生こちらを向いて下さい(須磨幸蔵)、刺激伝導系の田原原著復刻—黄色い表紙のモノグラフ(須磨幸蔵)、アシヨフ・田原国際シンポジウムについて(島田宗洋)。(四)「心臓学の進歩・発展への寄与」。田原結節(有田眞)、田原通り・九州大学医学部での田原先生(田口健)、恒吉正澄)、心臓刺激伝導系の構造—田原のスケッチを電子顕微鏡で追う(島田達生、小野紀昭)、解剖学への貢献(柴田洋三郎)。(五)「田原先生を偲ぶ(生誕百年記念座談会)」。

この書をひもどけば田原先生の生涯、人となり、研究の詳細、後世への影響が生き生きと具体的に迫ってくる。

田原先生は明治三十六(一九〇三)年から三年間、ドイツ、マールブルク大学のアシヨフ教授のもとに留学され、アシヨフ教授の「肥大した心臓はなぜ弱いか」というテーマで研究を始められ、三年後(一九〇六)には、房室結節(田原先生の発見)が心筋束に繋がりが、それが右脚と左脚に分枝し、さらにこれが一八四五年にプルキンエの発見したプルキンエ線維に接続することをつきとめ、心房と心室のリズミカルな収縮と弛緩が神経による伝導でなく、特殊な心筋細胞(細胞体とその突起)によって行なわれていることを示し、さらに心臓全体の刺激伝導を取り仕切る系の全貌を解明し、「刺激伝導系(Reizleitungssystem)」と名づけられたのである。「本